農閑期に入り不要なプラスチック等をJAが代行処理

廃プラスチックを回収し適正処理へ

▲廃棄プラスチックの処理申請を行う農家

ビニールや肥料袋などの農業用廃プラスチックを回収し、JAが代行処理申請を行う取組みが11月29日、JAの各営農センターで行われました。

この廃プラ回収は、環境保全と不法投棄を防ぎ、農家が廃プラ類を適正処理するための手助けとして、年数回行われております。当日は、JA青年部員やJA職員が農家からの処理委託に対応しました。営農センターには雨の中、廃プラスチックを積んだトラックが次々と訪れ、全体で46名、9.9tが処理委託されました。利用者は、「処理に困っていたので持ってきました。JAが代わりに処理を行ってくれるので大変助かりました。」と喜んでいました。

主力品種「リュウホウ」を白神から全国へ

大豆の品質検査がスタート

▲粒の大きさやシワ、紫斑病などを検査する担当者

平成26年産大豆の検査が11月からカントリーエレベーターにて始まり、品位鑑定資格を持ったJA職員たちが、収穫された大豆の出来を確認しました。

検査に立ち会った高橋組合長は「8月の長雨の影響により収量は少ない状況となっている。しかし、刈り取り時期が好天に恵まれたため、等級の下がる原因のシワが少なく、高品質のリュウホウが集まってきている。」と話し、また担当者は「収量は若干少ないが、粒大比率は去年を上回っており品質は申し分ない。この先もこの水準を維持していくことを期待している。」と話していました。この検査は2月まで続きます。

26年産米を取り巻く状況を打開し販売環境の好転を目指す

平成27年産飼料用米取組説明会を開催

▲飼料用米について説明するＪＡ全農あきた伊藤米穀総合課長

ＪＡあきた白神では、飼料用米への取り組みについて、11月28日に能代工業団地交流会館にて説明会を開催しました。当日は、生産者・ＪＡ・全農など130名以上が参加し、飼料用米をめぐる情勢や、ＪＡ全農あきたでの取り組み方針、飼料用米の特性および栽培の注意点、出荷に関わる制約・条件等について、生産者に説明しました。

会場では、契約数量や基準単収・出荷方法・検査基準・病害虫防除などについて多くの質問が出されました。ＪＡ全農では27年産飼料用米について全国で60万トンの生産目標を掲げ、生産拡大に向けて取り組みます。